

中部アンデスにおける

村落共同体の地理的意義

佐々木高明

【要約】 中部アンデス地域には古くから *mita* とよばれる共同体の存在が知られていた。これはもともと拡大家族を単位とし、地域内婚によつて結合された一種の生活共同体であるとともに、耕地や灌漑水路・牧地を共有し、土地割替を行う経済的共同体であり、また行政の単位でもあつた。スペイン人の征服以後、外来文化の侵入によつてこの共同体は、一部ではその成立の物質的基礎を奪われ、急速に解体して行くものもあつたが、他方では解体を阻止する種々の条件に支えられ、その変容の過程に遅滞を生ずるものも少くなかつた。これらの変容過程の遅滞する共同体では、その内部に固有の土着文化を比較的よく保持したため、共同体を覆つて拡散した外来文化と土着の文化が漸々に混濁することができ、その結果、今日の中部アンデス地域を特徴づける民族文化が形成されたのである。つまり共同体の変容過程の特質の中から、中部アンデスの民族地域の特色が生み出されてきたことができる。

はしがき

近時、社会科学の各部門においては村落共同体の研究がきわめてさかんに行われている。しかし少くとも地理学の立場から、それを問題にする場合には、元来《もつとも基礎的な Local group》といわれる村落共同体は、複雑な階

層構造をもつて統合された「地域」の底辺を構成する最小の地域単位としてとりあげられねばならない。すでにこの方面ですぐれた業績をあげている水津一朗によれば、かかる最小の人文地域単元は「基礎地域」となづけられる。基礎地域とは「地域を構成する細胞にもたうべき」存在であり、そこにおいて諸集団が機能的に結合される「最小の

地域統一体としての《集団積分体》^③のおかれる場」なのである。ところで、かかる基礎地域も、そこに内在する諸要因、或は外部からの刺激によつて常にその機能を変化せしめ、統一体としての個性を漸々に失ひ、機能的進化の過程を辿ることが明らかにされている。^④而してこのような基礎地域の変容、進化は、当然それによつて構成される「地域」の性格を変化せしめることは言う迄もない。つまり現在の「地域」のもつ性格なり特色なりは、その「地域」を構成する基礎地域の変容、進化の過程と密接に関連して形成されてきたとも言得るのである。勿論この場合、基礎地域の変容、進化の様式はそこに働く諸要因の相違によつて相互に異り、地域的に大きな偏差を示すものである。従つて現代のある特定の「地域」のもつ特色を探求する際には、この基礎地域の変容、進化過程の地域的な差異或はその特質を把握することが、もつとも重要な手掛をなすものと見做されるのである。

現在中部アンデスの地域は、メスチソン文化とよばれる土着のインディアンの文化と外来のスペインの文化によつて混成された、特有の民族文化の存在によつて特徴づけら

れるが、^①この地域の文化的特色を生み出すに当つて、村落共同体と基礎地域は如何なる機能を演じたであろうか。中部アンデス地域に古くから存在した ayllu とよばれる共同体の変容過程を通じ、以下この点に関し、二、三の考察を加えてみたい。

① 水津一朗、地域における階層性と異質性、人文研究五の二、四二頁、一九五四年。

② 同、基礎地域とその人口規模、人文研究七の九、一頁、一九五六年。

③ 同、「地域論」の機能主義的展開、地理学評論三一の一〇、とくに五頁以下、一九五八年。

④ 拙稿、南アメリカ（姫岡・藤岡編、世界地理民族誌所収）二五八頁、一九五四年。

一、共同体成立の基礎——農業と居住様式——

エクアドル南部からペルー及びボリヴィアを含む中部アンデス地域における経済活動は、相異なる自然的性格をもつ三つの空間を舞台に展開されてきた。すなわち、その一は乾燥の著しい狭長な海岸平野に連る大小約四〇を数えるオアシスであり、その二は二〇〇〇〜四〇〇〇メートルの高西部に存するいくつかの河谷平野と盆地群で、ここでは温

带的な良好な気候がみられる。そして最後は、四〇〇〇メートルを越える高原上に展開する冷涼なブナ草原地帯がそれである。このうち、海岸低地のオアンスや高地の河谷底或は盆地床では灌漑農業が、河谷斜面や盆地壁では階段耕作が早くから発達し、また高原上のプナ草原地帯ではリヤマやアルパカの牧畜が古くから営まれていたことが知られている。中部アンデスの農業はこれらの灌漑農業、階段耕作及び山地牧畜を軸に発展してきたものといわれている。かかる農業複合体の起源については、現存なお明らかにし得ないが、北ペルーのViru Valleyのプレセラミックの遺跡Huaca Prietaから栽培種の棉・ヒョータン・南瓜・胡椒・豆類などが出土している点からみて、少くともB.C. 3000年頃にはその萌芽がみとめられるのである。①その後発展の詳細をここで迎えることは紙数の関係から避けるが(第一表参照)、とにかく紀元前後の文化形成期 Formativeには、小規模な灌漑設備がつくられ、トウモロコシの栽培がさかんになつたといわれており、さらに地域文化開花期 Florescence に至ると、この中部アンデスの農耕文化は一応 climax に達したものと考えられている。即ち当時す

第1表 ベルー海岸における文化発展の概略 (Collierによる)

項目 時代	栽培植物	家畜	灌漑	人口	集落様式	
1532	↑	↑	↑	減少?	↑	
軍事的国家 拡張期				減少?	elite型・lay 型都市	
				やや減少	矩形の計画的・ 四廓集落	
1000	地域文化開 花期	50種以上の 栽培植物	後期：河谷間の 灌漑組織完成 初期：河谷内の 灌漑組織完成	人口極大	中型集落；ピ ラを中心とし た大農耕集落	
200 A.D. B.C.	文化形成期	frijol豆・ pepino	リヤマ・ア ルバカ・モ ルモット	水路灌漑の拡 大、但し河全 体の統制欠く	頭著な 増加	河谷各地に立 地する大集落
		トウモロコ シ・マニョ ック・南瓜	若干の リヤマ	灌漑の氾濫 灌漑?	増 加	地表に建てら れた小集落
1200	初期農耕文 化期	棉・ヒョウ タン・胡椒・ canavalia 豆	ナ シ	ナ シ	稀 薄	海岸における 半地下式小家 屋

で五〇種にのぼる栽培植物の馴致が完成し、灌漑設備もペルー全域に亘り高度な発展をとげていた。例えば地域文化開花期前期に當る Early Mochica 期と推定される Chicama 谷の灌漑水路用の堤防の如きは、一五メートルの高さを有する巨大なものが見出される。また多くの谷には灌漑用水路が幾マイルも延びており、それらは等高線に沿つて注意深くつくられていたといわれる。そしてこれらの用水路の中には石垣やテラスで補強されているものも多く、また必要に応じて大きな水門や給水用の複雑な水路網が築造され、時には暗渠式の水路さえ建造されていたのである。^④

この様な灌漑農業の発展と関連して、高地部の傾斜地には大規模な階段耕作も実施された。これらの耕地は石垣で入念に築き上げたものであつて、Bowman と Salamanca 河谷において、谷底から二五〇〇フィートに及ぶ征服以前に築造された階段耕作が今なお存在し、この谷の稠密な人口がその耕作に依存して生活していることを述べている。^④

また高度差の大きいこの地域では、気温の垂直的变化が著しいため、その変化に応じて多くの種類の栽培植物の馴致が早くから行われた。この場合一般に、温暖な三〇〇〇

メートル以下の地域では、トウモロコシ (*Zea Mays*)、マニオック (*Manihot utissima*)、豆類、瓜類が主作物として栽培されていたのに対し、三〇〇〇メートル以上の高冷地では、Oca (*Oxalis tuberosa*)、Quinoa (*Chenodium quinoa*)、Olluco (*Tilinius tuberosum*) などの高距限界の高い根菜類がまず馴致され、つづいて収穫率の大きい四倍体の馬鈴薯 (*Solanum tuberosum*) の馴致がきわめて古い時代に完成された^⑤と推定されている。しかもこの馬鈴薯を中心とした根菜類の作物複合体は冷涼な高地気候にきわめてよく順応したものであつたことは注意すべきで、後に述べるように、高地部への外来農業の侵入に際し、このポテト複合体は根強い抵抗を示したのである。平均高度三五〇〇メートルを越えるポリヴィア高地の Aymara 族などでは、大麦・小麦などの新しい作物が輸入された今日ですら、馬鈴薯とキノアの合計が全収穫高の過半を占めている状態であり、征服以前の彼らの農耕が馬鈴薯・キノアの耕作を中核に展開していたことが想像されるのである。要するに、征服以前のアンデス地域の農業は、適当な牽引獣 draught animal を欠いたため、犁耕こそ発展せしめ得なかつたが、農業技

術の発達は著しく、乾燥気候に対しては、灌漑と階段耕作により、冷涼気候に対しては、特殊な作物の馴致によつて高度な技術的順応をなしとげていたと言ひ得るのである。従つてその土地生産力も高く、征服当時、インカ帝国は約六〇〇万の人口を有し、^⑤一方軒当り三九人という高い人口密度をもつていたものと推定されているのである。

このような農業の発展に應ずる居住様式の進化、発達の上程にも、また種々の特色を指摘することができる。ただその詳細を述べることは本稿の目的ではないので、他日に譲ることにし、ここでは共同体成立の基礎を理解するに必要な範囲の記述に留めたい。

Means & Osborne によれば、インカ時代の家屋は現代のそれと殆んど大差のないもので、一般に石造或は日乾燥瓦 adobe 建の窓のない、切妻屋根をもつ矩形の家屋であつたといわれている。^⑥この家屋にはそれぞれ父居制の小家族が居住するが、通常これらの家屋は数ヶ集つて、周囲に低い壁をめぐらし、中庭を抱く一つの compound (屋敷地) を形成している。そしてこの compound が集落を構成する基本的な居住単位となるとともに、社会的には com-

-pound の成員が血縁により結び合わされ、一ヶの父系の大家族 extended family をつくつてゐるのが常である。^⑦

このような compound を構成単位とする集落は中部アンデスではきわめて古いものであり、Willey によればすでに初期農耕期 Farley, Agricultural (B. C. 3000~B. C. 1000) にその原初形態がみとめられるといわれている。^⑧而してその後、農業の発展と人口の増加に伴い、これらの集落はその数と規模を拡大した。その結果、一方では寺院を中心に、或は戦略上の要衝に、いくつかの都市的機能を備えた大集落を成立せしめたが、^⑨これらの都市を別にしてもブレ・インカ時代にはすでに三〇〇家族、一五〇〇人程度の人口規模を大型の農耕集落も少くなつたといわれている。しかしこれらのブレ・インカの集村は compound が不規則に並ぶ非計画村落であり、その多くは防禦の必要から、耕地からやややなれた斜面の中復や岩石の露出地などを選んで立地してゐた。これに対し、インカ時代の集村は耕地の近くに移動し、また新しく建設された寺院や兵營或はインカ道路などとの関係から、人為的に計画され、建設されたものの少くないことが知られるのである。^⑩後に述べるインカ時

代に行われた共同体の再編成が、かかる集落の立地移動と密接に関連して行われたものであることに、注意が払わねばならない。

ところで、耕地の少ない山地部などでは、このような集村とは異り、compound が広く斜面に散在する散居村の発達もみられたのである。例えば後に述べる中部ペルー高地の牧畜に依存する村落 Santa Barbra・Choclococha・Quinoa などでは、住民の一部が谷底の集村に居住するほか、住民の大半が斜面に散居していることが報ぜられてゐる。^④つまり海岸低地や盆地の平坦面に発達した集村に対し、散居は山地斜面に順応した居住様式とみることができるとである。しかしいざれしても、それぞれ一々の父系の大家族によつて占居される compound を居住の基礎単位としてゐるところに、中部アンデス地域における村落構造の基本的な特色を見出しうるのである。しかもこれらのインカ或はそれ以前に起源を遡りうる集落の多くが、現在まで、その位置と名称を踏襲していることも注意をされねばならない。

④ Bird, J.: Preceramic Cultures in Chicama and Viru, (A Reappraisal of Peruvian Archaeology, Memo. Soc. Am.

Arch. No.4, 1948) p. 24, 28.

② Collier, D.: Development of Civilization on the Coast of Peru (Irrigation Civilization: A Comparative Study, 1955) p. 17—27.

③ Bennett, W. C.; Engineering, Steward, J. ed.; Handbook of South America Indians, (Bull. H. S. A. I. No. 47) Vol. 5, 1949 p. 57.

Inca Viracocha によつて建設された主要灌漑水路の二つは幅一ニメートル、延長一五〇メートルに及ぶ大きなもので広大な面積を灌漑した。(Means; Ancient Civilization of Andes, 1931 p. 250—251.)

④ Bowman, I.; The Andes of Southern Peru, 1916 p. 57.

⑤ Sauer, C.; Agricultural Origins and Dispersals, 1952 p. 50. Sauer, C.; Cultivated Plants of South and Central America, H. S. A. I. Vol. 6, 1950 p. 518—519.

⑥ Tschopik, H.; The Aymara, H. S. A. I. Vol. 2, 1946 p. 514.

⑦ 栽培植物においてをわめて豊かな品種を示す新大陸も家畜の馴致について貧弱で、大型獣は僅かにマンデスにおいてリャ・アルパカを馴致したに留る。しかもこの羊ラクダ種に属する動物は、元来高地性の力の弱い動物であり、平地で重い犁を引くに適していなかつた。このことが犁を発生せしめる技術的素地が乏した(C. D. Forde; Habitat, Economy and Society, 1952 p. 436.) にも拘らず、中部マンデスでそれがみられなかつた原因を察せられる。

- ② Rowe, J. H.; Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest, H. S. A. I. Vol. 2, 1946 p. 185.
- ③ Steward, J.; Native Population of South America, H. S. A. I. Vol. 5, 1949 p. 660.
- ④ Means, P. A.; Ancient Civilization of Andes, 1931 p. 310—311. Osborne, H.; Indians of the Andes, 1952 p. 115—116.
- ⑤ Rowe; *ibid.* p. 223.
- ⑥ Willey, G. R.; Peruvian Settlement and Socio-Economic Patterns (Tax, ed.; The Civilization, of Ancient America 1951) p. 195 ff.
- ⑦ Schaedel, R. P.; Major Ceremonial and Population Centers in Northern Peru (G. A. A. 1951) p. 232—243.
- ⑧ Steward, J.; South American Cultures: An Interpretative Summary, H. S. A. I. Vol. 5, 1949, p. 733—734.
- ⑨ Tschopik, H.; Highland Communities of Central Peru, A Regional Survey, (Smithsonian Institute of Social Anthropology, Publication No. 5, 1947) p. 22, 23, 32.

二、インカ時代の共同体とその性格

(一) ayllu に関する諸学説

中部アンデス地域においては、ayllu とよばれる共同体があり、これが基本的な社会集団をなしていたことは早く

から知られていたが、その性格については、モルガン以来氏族 clan と考える見方が強かった。即ちモルガンが『古代社会』の中でアンデス地域における氏族の存在を指摘して以後、今世紀に入っても Bandelier^⑩ や Olson^⑪ などいざれもこの ayllu を以つてそのまま氏族となす立場をとつてきた。Means もインカ文明研究史上不朽の名著といわれる『アンデスの古化文明』の中で、ayllu はアンデス地域に広く存する古い基礎的な社会集団であり、同時にインカの行政単位をなしていたと述べ、この ayllu は本質的には tribe^⑫ であるとしている。また Murdock も ayllu は即ち氏族であり、族外婚を行う血縁集団を中心とし、共通のトテムをもつことを特色とすると述べて ayllu-clan 説を支持したのである。⑬ このように戦前においては、ayllu を氏族とみなす学説は不動の地位を占めていたということができる。ただこの中にあつて、Cunow が、ayllu は血縁共同体であると同時に土地を共有する経済共同体である点に着目し、これをマルク共同体とみなし、その経済的機能について詳細な説明を加えたのは、戦前の研究の中で異彩を放つてゐる。⑭ しかし、戦前の諸研究に共通する欠点として、

Cunow の場合にも断片的なスペインの古記録を資料とし、これにもとづくのみで、現存する *ayllus* の遺制に十分考慮が払われなかつたため、分析に公式論が少くなく、批判さるべき多くの欠陥を有している。

これに対し、近時、植民時代初期の古記録の研究や、現在の土着村落社会の研究が進むにつれ、これらの *ayllu*=clan 説を中心とする従来の見解には、手厳しい批判が加えられるようになった。これらの批判を綜合し、*ayllu* の性格につきもつとも新しい見解を述べたものとして J. H. Rowe の説をあげることができる。

Rowe によればインカ時代の *ayllu* の性格は、Quechua 語本来の意味からしても、一種の血縁集団 *kin group*——きわめて稀薄な、ときには神話的始祖にまで遡る觀念的な血縁により結び合わされた——であり、父系の出自を辿り父居制をとることを特徴としている。しかし婚姻は *ayllu* 内の地域内婚制 *endogamy* を原則としており、さらに *ayllu* には人物、動植物、自然現象などをその祖先とみなし、これを崇拜することはあつても、各家族の直接の祖先がこの共通の始祖であると思倣すことはない。また特定の動物の

食肉の禁忌などのトーテム儀礼を欠くことから、*ayllu* をトーテム集団とみなすこともできないとしている。こうした点から *ayllu* は厳密な意味で氏族とは言難く、さらにその原初形態においても *ayllu* が真の氏族であつたという歴史学的、民族学的証拠は存しないとは結論している。

(二) *ayllu* の社会構成とその規模

ところでこうしたインカの共同体の性格の解明に當つて有力な手掛りを与えるものは、征服以前にインカ帝国の一部を構成し、今なお古い文化的特色をよく伝えるといわれるボリヴィア高地のアイマラ *Aymara* 族の共同体の研究である。

Titicaca 高地のアイマラ族を調査した LaBarre や Tschoppik によれば、現存するアイマラ族の *ayllu* は「相互に血縁で結ばれない拡大家族 *unrelated extended family* の集団」として特色づけられる。而してこの村落内部における基本的な社会、経済単位をなす拡大家族は、父居制の小家族からなるが、通常これが一団となり、既述の如く、一つの *compound* (インカでは *Ranca* とよみ) を形成して居住している。従つて結婚した息子は *compound* 内に宅地を

与えられ、娘は結婚すれば夫の compound に行くのが通例である。またこれらの大家族は各々 tunu とよばれる祖先に父系の出自を辿つて結ばれているものと信ぜられ、それぞれ動・植物に因んだトリーミングな家族名を有することが多い。さらに ayllu 内部でこれらの大家族は *efancia* とよばれるより大きな集団に組織されていることも少なくないのであつて、その構成は複雑である。ただこの場合、常に tunu を共有する大家族が外婚単位を形成していることは注目されねばならない。ayllu が本来内婚制をとる社会集団であることは今日では定説となつているが、既述の Rowe は植民時代初期の裁判の記録の分析から、征服以前のケチュア族の社会には、ayllu 外部との婚姻の慣習の存しなかつたことを実証しており、また現在のアイマラ族の調査においても、ayllu 内婚率はきわめて高く、それに伴う村落社会の結合が非常に強いことが指摘されている。例えば Tshipok の調査したペルー南部の Chucuito に居住するアイマラ族の Gota ayllu では八五%、Tehu の Oxerana ayllu では九〇%の内婚率を今日も示している^③である。

第2表 アイマラ族におけるaylluとその家族数

ayllu の名称	その英訳	家族数
Mallaconaca	chieftains	61
Puma	mountain lion	53
Jaycota	salt lake	75
Tanga	maize (?)	29
Sullcabi	—	56
Catasa	—	77
Quitaquita	—	65
Collana	sister (?)	15
Coro	—	22
Caracolio	— peak (?)	120
Cala	stone	155
Cupiazza	—	125

以上の点から、少くとも古い典型的な ayllu はいくつかの大家族によつて構成され、これらを村落内婚という紐帯によつて統合した一種の生活共同体であつたと考えることができる。かかる ayllu の統合は、今日でも多く見受ることのできる村落の祭礼のとき、各家長が共通の一つの腕から食物をとる儀礼によつて、象徴されているといふことができよう。

ではこの ayllu はどの程度の人口規模をもつ共同体であろうか、Saavedra は標準的な ayllu の大きさは二〇乃至

四〇家族から成り、人口一〇〇〇〜三〇〇〇人程度とみなしているが、LaBarre の掲げた Carangas 州の例では (第二表)、大は一五五家族によつて構成されているものから、小は僅か一五家族にすぎない小規模なものまでその規模は異なるが、平均七一家族、約三八〇人程度の人口規模を示している。^④ また Kubler によれば現在ペルーには約三、〇〇〇の村落 *commune* があり、一、五〇〇、〇〇〇人の人口がそれに居住しているといわれている。^⑤ この村落の中には後述の如く二つ以上の *ayllus* によつて構成されているものもあり、さらには最近における村落人口の増加をも考慮に入れれば、征服前の中部アンデスにおける *ayllu* 共同体の標準規模は、ほぼ五〇〜七〇家族、三〇〇〜四〇〇人程度のもので大過ないものと思われるのである。

さてこの場合、*ayllu* は原則として社会的にも、地理的にも独立した一つの村落を形成することが常であるが、必ずしも全ての村落が一つの *ayllu* によつて構成されているとは限らない。例えば Titicaca 高地の村落 Calacota は九ヶの *ayllus* によつて構成されており、可成りの人口を有している。また Pacajes の半砂漠地域に位置する Ulloma は

僅か五家族によつて構成されている小村落であるが、四つの *ayllus* に分れているのであつて、中部アンデスにおける基本的な共同体 *ayllu* は村落と必ずしも一致するものでないことは注目されねばならない。とくに前節においても触れた如く、中部アンデス地域では、早くから人口数の多い大型の集村が形成されていたが、かかる都市的な大集落では古くからいくつかの *ayllus* をその中に包括してきたものと考へらる。これらの大村落或は都市内の *ayllus* はインカの場合には Hanan-saya と Horin-saya、アイマラ族の場合には Masaya と Arasaya とよばれる——それぞれ upper と lower の意——二つの moiety (半族) に組織されるのが常である。^⑥ さきに述べた Chucbio にもこの存在が確認されているが、とくに有名なものはインカの首都 Cuzco のそれである。ここでは、Hanan-saya に一、Horin-saya に一〇の *ayllus* が属していたことが知られている。^⑦ 而してかかる双分組織の存する村落や都市では、moiety が地域内婚の単位となり、儀礼の単位となつて、*ayllu* の機能の一部を代行していることが少くない点に注意が払われねばならない。

さてこのような社会構造をもつ ayllu は具体的にどのような経済的、行政的機能を有していたであろうか。

(三) ayllu の諸機能

Bram はインカ時代の ayllu の特色を要約して、
 ① curacas 或は sinchi とよばれる首長を中心にしたままとまつた行政単位であること。②土地共有制にもとづく、階層の未分化な社会であること。③経済的にも自給体制をもち、④方言を同じうし、⑤共同の儀礼をもつことの諸点を指摘している。つまりインカ時代の ayllu は行政、経済、宗教その他の諸機能の集積する基本的な社会集団として意義づけられることができるのである。

一般に ayllu は一定の境域をもっている。ただその内部においては、衣服、道具、武器、その他の日用品をはじめとし、家屋、宅地及び家畜などについては各家族の私有権が認められているが、土地——その中には耕地、牧地、河川、湖沼、森林、鉱山、道路、溝渠などが含まれる——はマルカ marca とよばれ、一切私有権はみとめられず、ayllu に属するものと見做されていた。そしてこのような共同体的土地所有のもとに組織たつた土地割替制が実施さ

れていたのである。即ち、毎年 ayllu の首長によつて各家族の成員数に応じて一定面積の耕地が割当てられ、これとともに各耕区毎に作物が定められて、ヨーロッパの三圃制にも似た土地制度が行われていたのである。^⑥

こうした土地制度は現在もアイマラ族で認められる。即ち、彼らの間では ayllu の土地はまづいくつかの耕区 ainoga に分たれ、ainoga は更に家族が利益権のみをもつ sayaña に分割されている。この家族耕地 sayaña の割当は毎年一月の祭礼の日に ayllu の首長(アイマラ族では hiakata とす)によつて決定され、同一の ainoga 内の各 sayaña は同一の作物を栽培し、同時に休閑すべきものとされている。

輪栽の作物や期間は、耕地の肥沃度や集落からの遠近、人口に対する土地の広狭などによつて異なるが、一般に肥沃な Chuucuto・Conima・Copacabana 地方などでは、初年目馬鈴薯、二年目オカ、三年目キノア或は大麥、四年目馬鈴薯のローテーションが、Juli・Desaguadero 地方では初年馬鈴薯、二年目キノア或は大麥の輪栽が行われ、その後どちらも三年間休閑地となる。また冷涼なプナ高地では、初年馬鈴薯、二年目 kanawa(馬鈴薯に似た根菜の一種)が作付され、以

後約一〇年間休閑する。これらの休閑地は必ずしも *Picu* とよばれて *ayllu* の共同放牧地として利用されるのである。^④ 同様の耕地制と作物輪栽、それにもとづく共同体による耕作強制の事實は、ペルーのケチュア族の村落でも今日みることができる。Cuzco 州の例では、馬鈴薯↓オカ↓大麦の三作の後、二年間休閑する方式がとられ、Kauri 村でも、後に詳しく述べるように耕地（ここでは *suetes* とよぶ）ごとに同じ作物がつくられ、第四〜五年の二ケ年は休閑期とし村の共同牧地に利用しているのである。以上の諸例では、大麦などの新しい作物を輪栽の中にとり入れたりして、部分的には征服以後の変化をうけているが、共同体的土地利用の本質においては、古い *ayllu* の土地制度の特色をよく示すものといえることができる。

ところでこの *sayana* の耕作、播種、収穫をはじめ、家屋の建築などの際には、*ayllu* の成員はいくつかの協同労働集団を組織し、協働を行うのが常である。そして我が国の「結」に似た *aini* とよばれる労働交換組織が古くから発達していたことも明らかにされている。^⑤ さらに *ayllu* の共同慣行の重要なものとしては、灌漑をあげることができ

る。インカ時代の *ayllu* の水利慣行については明らかにしないが、アイマラ族では河流や灌漑水路、主要な泉などは全て *ayllu* の共有としているものが多く、主要水路の掘鑿や毎年の溝浚えは *ayllu* の首長の監督のもとで行われている。^⑥ また一つの水路をいくつかの *ayllus* で利用している場合には、二、三夜づつ区切つて各 *ayllus* に平等に給水が行われ、各 *ayllu* では多数の水路の給水を調整して、その成員に雨季中に必ず一回以上水をひく機会を与えるよう統制が行われている。^⑦ かかる事実からみてインカ時代の *ayllu* は水利統制の主体としても重要な機能を演じていたものと考えられるのである。

以上の如く *ayllu* は、土地割替、共同労働、水利統制などを通じて生産活動を規制する経済的機能をもつ共同体であつたが、同時にそれは *Bram* も指摘したように、行政の最小単位としての機能をも荷う基礎集団であつた。征服当時インカ帝国はまず四つの大行政区 *soyo* に分たれ、*soyo* はインカ以前の *tribal group* 或は *native state* を踏襲する行政区 *waman* 或は *wanani* に分たれていた。さらに *waman* は伝統的な双分制に従つて二つの *sayra* に分れ

(人口が多い場合には三つの *sayas* に分たれることもある)、各 *syra* はいくつかの大きさの異なる *ayllus* によつて構成されていた。^⑤そして、各行政区にはそれぞれ人口に応じて階級の異なる行政官がおかれてきわめて整然とした行政組織が備えられていたことが知られている。インカ時代の *ayllu* はかかる行政組織の最下部に編入、固定せしめられ、一種の行政村としての性格を与えられていたのである。従つて *ayllu* の首長 *curacas* (アイマラ族では *hiakata*) は既述のように土地割替、灌漑水利の統制、監督に当るほか、共同体内の簡単な裁判権をもち、徴税の義務を負つていたのである。^⑥ところで、インカ時代の課税は全て賦役の形をもつて支払われていた。このため、*ayllu* には各家族へ割当てられる耕地のほか、太陽神の祭祀用耕地とインカの帝室用耕地が必ず付随し、*ayllu* の農民はこれらの耕地を共同で耕作することを義務づけられていた。^⑦*curacas* はその監督と収穫物の収納にも当つていたのである。このほかインカ政府は、軍隊、鉱山或は公共事業のため労働力 (これを *mita* とよぶ) の提供を、*curacas* を通じて各 *ayllu* に割付けていたのであつて、かかる点からインカ時代の *ayllu* は行政

課税の単位としての機能を荷つていたということができるのである。ところで現代ボリヴィアの行政機構の最下部の単位は「村」*comunidad* であるが、そこでは今なお、法制上の行政官 *corregidor* 或は *alcalde mayor*、*ayllu* の首長 *hiakata* が实际的な権力を握つているといわれている。この場合 *hiakata* の選出は、以前 *hiakata* であつた村の長老の推挙によつて、家長達の中から年長のものが、選ばれるのが通例である。またその任期は今では六ヶ月に短縮されているが嘗つてはもつと長かつたものと推定され、とくに周辺地方では伝統的な *hiakata* の権威が、今日でも著しいことが指摘されている。^⑧

以上のようにインカ時代の *ayllu* は、平均三〇〇〜四〇〇人の人口規模をもち、地域内婚によつて結合された生活共同体であるとともに、経済、行政の諸機能の集積する基礎的な共同体として特徴づけることができる。しかし *ayllu* そのものの起源は、インカ以前にまで遡るものであることは今日では定説となつてゐる。例えば祭祀用、帝室用、家族用の三つの耕地の区分も、もともと古い共同体が祖神と首長のための耕地をその内部に有していたものを踏襲し、イ

ンカ時代になつて制度化したものとされている。インカ時代にはむしろ旧来の *ayllu* の一部を移動、合併せしめて、インカ帝国の行政単位に適する形にその一部を再編成したことが明らかにされている。Rowe はこの点を強調して、「出自によつて結合される血縁集団から、多くの家族が同一の場所に居住することによつて形成される村落共同体への進化はすでにインカ時代にはじまつた」と述べている。^⑧つまり原初的な *kin-community* から大家族を構成要素とする *unsegmented community* への進化がインカ時代に行われたことが知られるのである。

しかしブレ・インカの原初的共同体の具体的な姿を知る資料は、今日我々には殆んど与えられていない。従つてここでは、一応インカの共同体を起点に、それ以後の共同体の変容過程を辿つてみることにしよう。

- ① モルガン、荒烟寒村訳、古代社会、一九九頁以下。
- ② J. H. Rowe の引用による。
- ③ 三品彰英、天々神族・國々神族と双分組織、史林三八の六、九頁以下による。
- ④ Means; *ibid.* p. 286 ff. の場合 *tribe* と云うのは単系血縁集団を意味するものと考えられる。

⑤ Murdock; *Our Primitive Contemporaries*, 1934 土居光司訳、上 一一二頁。

⑥ Cunow, H.; *Allgemeine Wirtschaft Geschichte*, 1926 藤沢保太郎訳、(1) 三四一頁以下。

⑦ Rowe, *ibid.* p. 253—255.

⑧ LaBarre, W.; *The Aymara Indians of the Lake Titicaca Plateau, Bolivia*, *Am. Anthrop. Memo.* No. 68, 1948 p. 141. Tschopik; *Aymara*, p. 539. p. 141.

⑨ Rowe; *ibid.* p. 252. LaBarre; *ibid.* d. 142.

⑩ 例へば *Aymara* 族の *Guanaque ayllu* は三三家族よりなるが、それが四つの *estancias* に分断されてゐる。即ち *Pulani* (三家族) *Kamacha* (六) *Twa* (一一) *Guanaque* (一一一) である。また総人口一七〇人の一家族平均人口は五・四六人と云ふ。(LaBarre; *ibid.* p. 144.)

⑪ *tunu* を共有し、家族名を同じくする大家族以外であれば、原則として婚姻は自由である (Tschopik; *ibid.* p. 544)。また同一家族名をもちながら、*compounds* 以上の *compounds* を占居する場合もあると思われる。

⑫ J. Steward の *ayllu* と *clan* の相異なる点として、この地域内婚をとりあげてあり、とくにその親族呼称が双系である点を強調してゐる。Steward; *ibid.* p. 734.

⑬ Rowe; *ibid.* p. 254. ⑭ Tschopik; *ibid.* p. 544.

⑮ LaBarre; *ibid.* p. 64.

⑯ LaBarre の引用による。 *ibid.* p. 144.

① LaBarre; *ibid.*, p. 142. 平均一家族人口数は註⑩の例により甚微。

② Kubler, G.; *The Quechua in the Colonial World*, H. S. A. I. Vol. 2. 1946 p. 409.

③ Tschopik; *ibid.*, p. 541. Means; *ibid.*, p. 306—308.

④ Rowe; *ibid.*, p. 263.

⑤ Mason, A.; *The Ancient Civilizations of Peru*, 1957. p. 172—173. 同用である。

⑥ Pozo, C.; *Social and Economic-Political Evolution of Communities of Central Peru*, H. S. A. I. Vol. 2. p. 485.

⑦ Rowe; *ibid.*, p. 266. 子供のなす夫婦に割当てられる耕地面積は 1 topo とよばれ、息子があれば夫婦に更に 1 topo、娘ならば 1/2 topo が割当てられる。1 topo の実面積は Garcilaso によれば 159 エーカー即ち約六・四反とされる。Tschopik の調査した南ホルの Chucuito のマイマ族では、ある富農(夫婦と子供一人)は二・二エーカーの自作地と〇・七五エーカーの借入地を経営し、中農(同)は一・六二エーカーの自作地を、貧農(夫婦と子供二)は〇・一エーカーの自作地と〇・五七エーカーの借入地を経営してゐる。(Tschopik; *ibid.*, p. 514.) また現在クスノコ付近では 1 topo は約三一・四アール、約三反とその単位が縮小しているが、後にもふれるように今日クスノコ付近では、約三 topo 弱の平均耕地面積をもつともいわれている。このような点から征服前 ayllu 共同体では一家族平均二エーカー余り即ち一町前後の耕地を経営してゐたものと想

定してゐるのではなからうか。

⑧ LaBarre; *ibid.*, p. 155—156. Tschopik; *ibid.*, p. 514—515.

⑨ Rowe; *ibid.*, p. 212, p. 255. Tschopik; *ibid.*, p. 543. この場合 *aini* を構成する単位は拡大家族と相互に等量の労働を交換する。

⑩ Tschopik; *ibid.*, 515.

⑪ LaBarre; *ibid.*, p. 84. ⑫ Rowe; *ibid.*, p. 262.

⑬ Rowe; *ibid.*, p. 264. Pozo; *ibid.*, p. 485.

⑭ Rowe; *ibid.*, p. 265—266. この Sun Temple と Inca のための耕地は場所によつてその大きさが異つてゐたらしいが、村落内におけるこれらの耕地の面積比や分布状態など一切不明である。

⑮ LaBarre; *ibid.*, p. 154—156.

⑯ Mason; *ibid.*, p. 172—173. p. 177. Rowe; *ibid.*, p. 272.

⑰ Rowe; *ibid.*, p. 262.

三、共同体の変容過程とその条件

一五三二年にはじまるスペインの侵入によつて、インカ帝国は瓦解し、インディアンは新たな主人を迎えた。この征服者たちは ayllu の土地を含めて全ての土地はスペイン国王の土地と宣言し、これとともに古い ayllu の土地共有制を廢し、土地私有制の実施を強制した。そして新に建設

した植民都市を中心に、インディアンの土地の接収を強行したのである。^①ここに *ayllu* の運命的な解体の悲劇が開幕する。

新大陸の植民に当り、その当初においてスペイン人のとつた土地制度 *encomienda* 制は、もともと特別な功績のある個人 (*encomendero*) に対し、自己及び相続人の終身期間中一定地域内のインディアンから貢物を要求する権利をスペイン王が認許する制度であつた。しかし実際には、エンコメンデーロは認許に拘りなく無制限にエンコミンダを継続、拡大し、さらに貢物のみでなく個人の労働給付を要求し、遂には *ayllu* の土地そのものをも占有するに至つたと言われている。^②

このようなエンコミンダの急速な拡大に伴い共同体はどのような変容を蒙つたであらうか。Kubler はその過程を大略次のように述べている。エンコミンダの範囲に入つた共同体では、或ものはマルカの耕地を白人に占居されたため自然条件の劣悪な土地へ追込められ、また或ものは彼らの食習慣とは全然関係のない貢租用作物(小麦・大麦・砂糖・牧草など)の栽培を強制され、さらには灌漑水利権を

白人に支配されたりしたため、共同体の伝統的な農業経営方式はそのバランスを失い、変化を余儀なくされた。その結果、多くの共同体はその成立の基盤を喪失して崩壊の過程を辿つたといふのである。^③ また征服者たちはインディアンの労働力を集約的に利用するため、しばしば計画的に集落を移動せしめた。この場合にもマルカとの距離が距るに従つて労働集約的な彼らの農業は経営できなくなり、これに伴い *ayllu* もその本来の機能を失つて消滅する例がみられる。^④ このほか植民時代初期には *mia* とよばれる鉱山、工場、土木事業、とくに鉱山に関するインディアンの強制労働制度があり、鉱山周辺の地域では長期間大量の労働力が *ayllu* から鉱山に吸収された。このため、共同体の人口が激減し、ひいては *ayllu* の存続に大きな影響を与えたことも見逃すことができない。^⑤ いずれにしてもスペイン人の侵入によつて多くの *ayllu* が決定的な変化を蒙り、急速な変化をとげたのであり、その結果共同体をはなれて生活するインディアンが多数発生した。この共同体をはなれたインディアンはとくに *yanacunas* とよばれ、共同体に残るインディアン *hatunrunas* と区別されているのは注意すべきであらう。

インディアン民族の特色を最初に失うのが yanacunas であり、hatunrunas は共同体の殻に閉籠り、彼らの民族的特色を比較の後までよく保持していたといわれている。

一七世紀後半、即ち植民地時代後半に入ると、エンコムエンダは廃止され、一応政治的には安定期に入るが、貨幣経済が発達し、土着の共同体は相変らず mita の提供、貢租やの地方行政官(curacas など)の供与の支払などの経済的負担をその内部で解決しなければならなかつた。このため一部の共同体では収入増加を計る方法として、各種の手工業を行つた。しかし、この場合にも価格の決定は植民者によつて行われたため、利潤は小さく却つて貨幣経済の中に巻き込まれ、自然経済に基礎をおく共同体の存続を脅かした。また他の共同体では、貢租を支払うため、外来種の商品作物の栽培や牛、羊、馬などの飼育を受入れ、収入の増加を計らねばならなかつたが、これも共同体への貨幣経済導入の重要契機となり、伝統的な農業体系の変化、ひいては共同体の解体を促す要因となつた。かくして植民地時代約三〇〇年間を通じ、村落共同体の殻を外から打破る諸々の条件が作用したのである。さらに独立以後の時代にな

つても、植民地時代の貢租は名目上は廃止されたが、なおインディアン税 contribucion de indigenas と名称を変えて存続し、共和国政府はその財政収入の 1/6 をこれに頼つている状態である。また mita も fanca と名目を改めて残存し大農場 hacienda や公共事業にその労働力が使用されている。さらに最近では土地私有制の徹底、貨幣経済の滲透によつて共同体を構成する各家族の経済的関心が多様化して、これが大家族を単位とする共同体の結合を弛緩せしめる原因になつていることも指摘されている。以上要するに、征服以後、中部アンデス地域においては、村落共同体の解体を促進する数多くの要因の作用してきたことが知られるのである。

しかしながら、他方ではこれらの共同体の解体を阻止するいくつかの条件のあることが注意されねばならない。まずその第一はスペイン人自身の植民政策の中に求めることができる。即ち植民者たちは貢租や mita を賦課するに当つて、個人ではなく既存の村落共同体そのものを課税対象として、共同体の首長 curacas にその徴集を命じた。そのため curacas の権威はインカ時代より一層大きくなり、共

同体の政治機構も征服前のそれが植民地制度の下部組織にそのまま組入れられ、処によつては却つて強化される傾向を示してゐた。Kubler は一般にエンコミエンダ制のもとにおつても、征服前と同様 Huansaya と Hurinsaya とよび二つの moiety が維持され、各 moiety はそれぞれ数

ヶの ayllu から成り、各 ayllu の curacas は貢租の徴集と mita の徴発を委託され、徴集された貢租は、hanan-saya の首長 primera persona のもとに集積されていたと報じてゐる^⑥。現代パルールの村落におつても alcalde とよばれる村長が、fanea 労働(以前の mita に当る公共事業のための強制労働)の実施・農耕の開始期の決定・公共の秩序の保持などの権限を有しているが、これも古い共同体の政治機構の残存を物語るものであろう^⑦。また Pozo の掲げたり、州の植民町 Santisima Trinidad de Huañec の例によると、この町は社会、経済、行政、宗教各方面において殆んど独立した二つの ayllus、即ち Huañec (人口三六八人)と Allanca (二五〇人)から成つてゐるが、各 ayllu は夫々首長をもち、学校や教会を共有するほか、共有の耕地と牧地或は灌漑水路を征服後も長い間有し、ayllu を單位に

fanea 労働に従事してゐたことが知られてゐる。この町において共有耕地の各家族への分割は Huañec では一八八八年、Allanca では一九〇八年になつてはじめて完全に実施されたことが明らかにされてゐる^⑧。

このように植民社会内部における共同体の古い行政機構の残存は、スペイン人の植民政策と関連するものであるが、一方において土地の共有や共同水利慣行に基礎をおく土着農業制度そのものの残存とも密接に関連することが考えられるのである。既に述べたようにエンコミエンダに包含され、植民政策の強い影響を蒙つた共同体では、土着農業の著しい変化を余儀なくされたものが少なくない。しかし、もともと中部アンデスの土着農業は、この地域の自然にきわめてよく順応したものであり、とくに高地部では新しい農業の導入に対し、気候的な制約が大きかつたこと。征服以後も土着民の食習慣が殆んど変化せず、また土着の農業慣行の伝統性がきわめて強固であつたことなどのため、中部アンデス地域——とくに高地部——においては、古い土着農業の特色が現在もよく踏襲されてゐるということができる。例えば作物についてみると、古くからアンデス高地

の基本的な作物をなしていた馬鈴薯、キノア、トウモロコシなどが今日でも重要な役割を演じており、小麦、大麦などの外来作物は多くの場合、本来の農業に付加された二次的な商品作物にすぎない^⑥。今日 Cuzco 地方の農家の平均収穫高が馬鈴薯三八・四〇五・二ブッシェル、トウモロコシ四・八〇六・四ブッシェル、小麦一・六ブッシェルと報告されているのもこのことをよく裏書きするものであろう。

また作物のみではなく、具体的な農業経営様式についても、高地部などでは、古い土着の様式がよく残存していることが注目される。前節に於ても、少しふれた Cuzco 州の一村落 Kauri におよぶは、過去八〇年間の人口増加によつて土地の分割、私有化が推し進められたにも拘らず、例えば現在でも耕作の開始は、春の祭礼の直後、三月一四日頃村長によつて行われる《耕地分配 repartición》の行事によつて、それぞれ所有地を確認されてから行われるのであつて、古い共同体の土地割替の農業慣行がよく伝えられている。事実その経営に際しても種々の共同体的規制がみられる。即ち村落の耕地は平坦面と斜面に六ヶづつ、計一二の耕区 suertes^⑦に分たれ、各家族は平地と斜面の耕

区に夫々耕地を分散所有(標準的な所有形態は平地の四耕区、斜面の二耕区に夫々一ヶ所づつ所有)している。そして各耕区毎に初年馬鈴薯、二年目オカ、三年目大麦、四、五年目休閑共同放牧、六年目休閑のローテーションが実施されているのである。耕地の分散は自然条件の異なる平地と斜面の農業生産を調整する機能を有し、耕区制による耕作強制については、無肥料で耕地の肥沃度を維持するためには、休閑放牧により、耕地の肥沃度の回復をはかる輪栽法に頼らざるを得ない農業技術水準の低さが、それを今日まで持続せしめた理由と考えられるのである。さらに彼らの使用する農具は、chaquitacla とよぶ足踏台のついた鉄の刃先をもつ掘棒と木棒に鉄刃をつけた鋤を中心に、土塊叩き、脱穀棒などから成り、インカ時代と殆んど変わらない貧弱なもので、とくに犁を今日でも所有していない。従つて作業能率も悪く、耕作、播種、収穫には協働を必要としている。現存でも Kauri の各農民は必ず一定の協働集団に属し、その集団内で昔と変らぬ労働交換 aine が行われている。また付近の河川から灌漑用水を引く際にも、小規模な水路の構築や浚渫、或は配水に常に共同体の統制を必要として

いるのである。このように彼らの農業技術は、征服前のそれと殆んど変らぬものであるため、この農業技術の低さを補うものとして農業経営には、各種の共同慣行が必然的に要請されたわけである。勿論、土地私有制を認めた Kauri の村落社会内部においては、既に社会階層の分化が起り、これに伴つて *aine* 共同労働組織も最近では著しく弛緩したといわれている。^⑧しかし中部アンデス地域全体を通じ、古い共同体の変容を阻止してきたもつとも重要な条件は、彼らの農業技術の伝統的停滞性にあつたことを否定することはできない。

① Pozo: *ibid.*, p. 487—489. 一五二三年から一五九六年に至る間の法律は原則的にインディアンの土地所有権を認めてはいるが、都市を中心に四リグ (一九・二キロ) の土地を都市と都市に住むスペイン人に譲渡すべきことを規定してゐる。またインディアンの土地を征服者が不法に占居した場合には、その土地がスペイン法により正しく彼のものであることを証明した場合のみ財産権がみとめられることになつてゐた。しかしこの必要を満足せしめることはインディア人には不可能であり、それは必然的に土地を失ふことを意味する。

② 田中耕太郎、ラテンアメリカ史概説 上 一四七—一四八頁。
McBride, G. M.: *Chile, Land and Society*, 1936 p. 65—67.
③ Kubler; *ibid.*, p. 342, p. 366. ④ Pozo; *ibid.*, 489—490

⑤ 例えば新大陸最大の鉱山であつた Potosi 鉱山ではその周辺の一七 provinces から毎年約一、二〇〇人の労働者を徴集してゐた。この地域内の賦役対象人口は約八万人であつたから彼らは七年に一回、一八週づつ鉱山で働く規定になつてゐたが、往復の旅行に数ヶ月要する例もあり、鉱山での労働が烈しかったために倒れるものも少なくなつた。しかも村落の人口が減つても *mita* の割当数は減らなからため、*mita* の間隔は短くなり、また鉱山での労働期間は不当に延長され、人口減少に一層拍車がかげられた。(Kubler; *ibid.*, p. 371—373.)

⑥ Kubler; *ibid.*, p. 348—349. ⑦ Kubler; *ibid.*, p. 353.
⑧ Mishkin, B.: *The Contemporary Quechua*, H. S. A. I. Vol. 2, p. 450—451.

⑨ Kubler; *ibid.*, p. 366, p. 374. ⑩ Mishkin; *ibid.*, p. 444.
⑪ Pozo; *ibid.*, p. 490—491.

⑫ Osborne; p. 174, p. 214—215. 第一節註⑥

⑬ Mishkin; *ibid.*, p. 423.

⑭ *ibid.* Kauri の農業経営については Mishkin; *ibid.*, p. 416—425. の記事に於て。

⑮ *suertes* は種々異なるが通常、幅数キロ、長さ数百メートルの長大なもので、その内部は約一〇〇ヶの plots (幅六〇—八〇メートル、長さ二〇メートル) に分たれてゐる。

⑯ 例えば耕作の際には三人一組となり先の二人が掘棒で耕作し、それに従う一人 (大低女か少年) がその耕土を交互に両側に整地して行く。この方法で五〇メートル耕作するに約二三分要す

るという。また播種にも三人一組で働くことが多い。

⑩ Kauriでは農民の約二〇%が余剰生産をもつ富農であるが、五〇%は食糧を自給する中農、残り三〇%は自給不能の貧農層を形成している。とくに最近家畜の飼育頭数が増加するにつれて貨幣経済の影響が強くなり階層分化が促進されている。

(Mishkin; *ibid.*, p. 428—429)

四、共同体遺制の残存とその意義

前節において述べたように、中部アンデス地域においては共同体を阻止する幾つかの条件が存したため、今日もなお共同体の遺制は本地域に広く残存している。Mishkinの調査した Cuzco 高地の村落 Kauriでは前述の如く、耕地のローテーションや共同労働、灌漑水利統制などに共同的規制が残存しているが、このほか社会生活の面においても、共同体の共属感情が強く排他的であつて、婚姻もそのほとんどが村落内婚に限られている状態である。^⑪しかし中部アンデスにおける共同体の変容は、早くから白人文化の影響をうけた低地部とそうでない高地部とは、その様相を異にするところが多く、共同体遺制の残存にも可成りの地域差のあることが考えられる。高地部における典型的

な共同体の残存例としては、右の Kauri のほか、南ペルーからボリヴィア高地にかけて居住するアイアラ族に ayllu が今も残存していることを既に述べたが(第二節)、これ以外にも、中部ペルー Ayacucho 州の高地村落 Quinoa をはじめ若干の例をつけ加えることができる。Quinoa は人口約一五〇〇人、日乾燥瓦建の家屋がプラーサ(広場)を中心に集る本村とその周辺の耕地に散在する多数の compounds から成る村落で、住民はトウモロコシの栽培を主として他に小麦、大麦、豆、キノア、馬鈴薯などを耕作し、リヤマ、牛、羊の小規模な牧畜を行つている。耕地は完全に私有地に分割されているが、村民が共同で使用する共有の放牧地を有している。とくにここで注意すべきは、村落が伝統的な双分制によつて hanan sayoc と hurin sayoc の二つの barrio (moieties) に分たれ、各 barrio が夫々数ヶの ayllu とよく似た性格をもつ estancias に分割されていることである。(第三表参照) 而してこの barrio と estancia には夫々 tenientes 及び alcalde とよばれる首長がいて、これらの社会集団は現実に社会的、行政的機能を営んでいるのである。^⑫ また Cuzco 州奥地の村落 Queros では、六つの

第3表 Quinoa における moieties と estancias (Tschopik による)

Hanan Sayoc :

- (1) Chiwampampa — “wet pampa.”
- (2) Susu — (translaion doubtful).
- (3) Paraqay — “white.”
- (4) Ñawinpukyū — “mouth (literally “eye”) of spring.”
- (5) Wiruyphaqcha — “cascade of the cañe.”

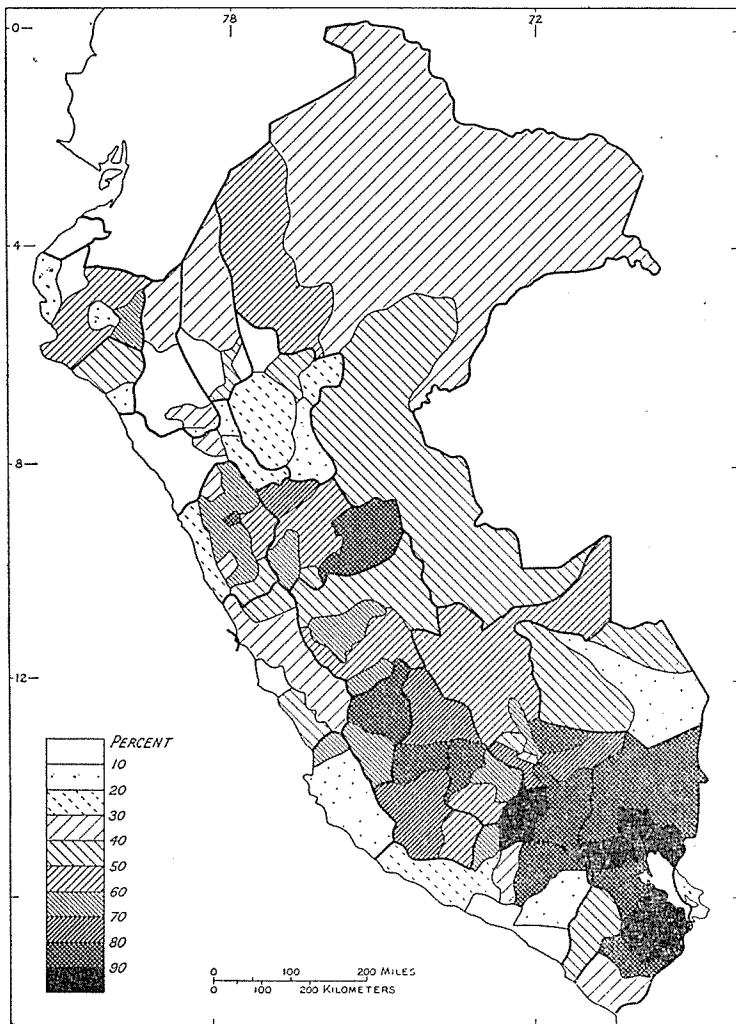
Lurin Sayoc :

- (1) Muya — “mountain meadow.”
- (2) Llamawillka — “llama amulet.”
- (3) Murunkancha — “products of the corral.”

haciendas に散在する約四〇の家族で一つの共同体を形成しているが、その首長 *alcalde* は *ayllu* の *curacas* と同様、今日もなお簡単な司法権をもち、農業労働や *tanea* 労働の監督に任じている。また *capillayoc* とよばれる長老によつて村落の宗教儀礼が統轄され、村落社会の統合が実現されている。かかる村落組織は恐らく征服以前の古いものが、今日まで残存したものであろうと *Mishkin* は述べているのである。^④ しかも同様の行政組織は *Huanavelica* 州の高地

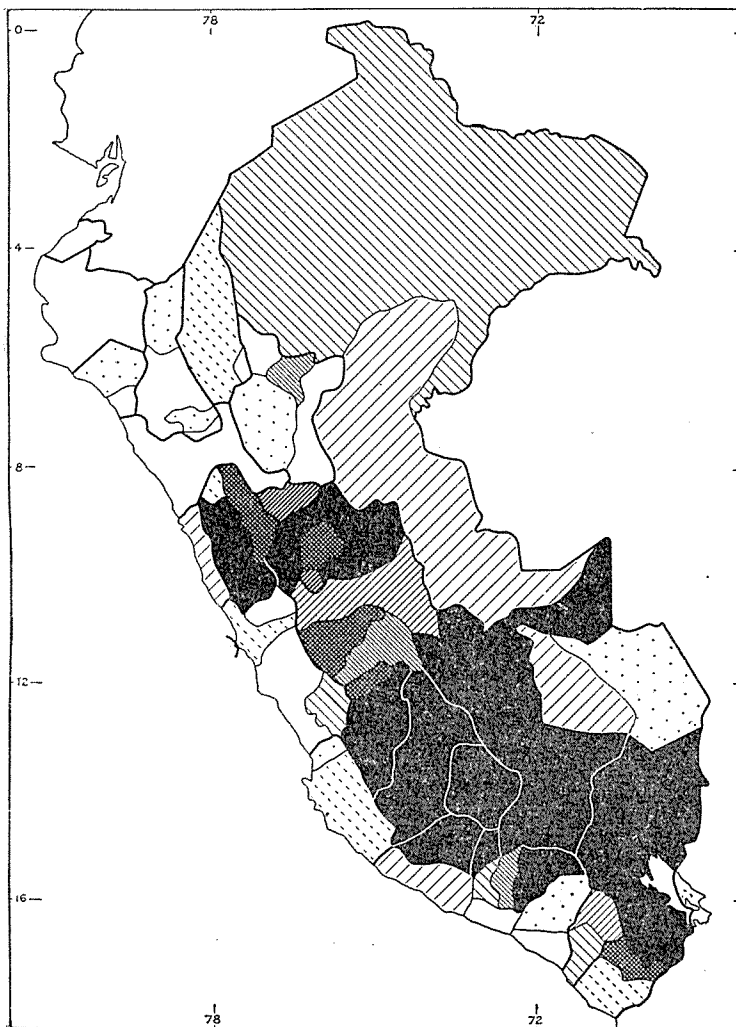
農牧村 *Santa Barbara* と *Chocococha* でもみることができ^④。とくに *Santa Barbara* では各私有地の相続人が絶えた場合、耕地は自動的に共同体の所有に帰する慣行が行われているなど高地部における共同体遺制の残存例は少くない。これに対し、ペルーの海岸低地のオアシス地帯では、気候的に砂糖、綿花、米などの有利な商品作物の栽培に適するため、*hacienda* の発達が著しく、共同体はこのため早くから耕地所有権や灌漑水利権を奪われて解体したものが多し。従つて低地部では共同体遺制の残存はほとんどみとめられないのである。例えば、*Trujillo* 市付近の小オアシス町 *Moché* の詳細な調査を行つた *Gilim* の報告によつても、^④ここでは主要灌漑水路の維持、管理に僅かに共同体的な慣行（共同労働で毎年浚渫を行う）がみられるが、しかしこの場合にも配水のコントロールは共同体によつて行われるのではなく、*Trujillo* 市にある『モーチエ川用水管理署』の監督のもとに『モーチエ水利組合』 *Asociación de Regantes de Moché* の手によつて行われている。しかもこの組合の代表者には用水の最大の利用者である付近の *hacienda* 所有主が就任して行つて、水利統制に

第1図 インディアンの分布 (Rowe による)



凡例の%は各州の人口中に占めるインディアンの割合を示す。ここにいうインディアンは厳密な人種概念ではなく、文化的・社会的特色において区分されたものである。また白人とメスティーソの区分は実際上困難であったという。

第2図 土語を話す人口の分布



凡例は省略してあるが第1図に同じ。土語を語りうる人口数は総人口約620万人のうち330万人程度、そのうち土語のみを語る人口は約170~180万人と推定され、いずれも中南部の高地部に集中している。

古い共同体的な規制はみることができない。このほか行政、社会、経済各方面において、共同体的遺制は現在殆んど残存していないといわれている。

ところで、一九四〇年に行われたペルーのセンサスによると、全人口六二〇・八万人のうち、その約四九・九%を占める二八四・七万人が《インディアン》として分類され、他の五二・九%が《白人及びメステイソン》、残りの一%が《黄色人及び黒人》となつてゐる。このうち白人及びメステイソン（その大半はメステイソン）の分布は北部高地及び海岸低地に多いのに対し、インディアンの分布は Puno・Cusco・Aurimac・Ayacucho・Huancavela の諸州や Ancash・Huanuco 州などのペルー中南部の高地に多い（各州の人口の七〇〜九二%がインディアン）。さらにこの傾向は《土語》（ケチュア語或はアイマラ語）を話す人口の分布において一層顕著にみとめられるのである（第一・二図参照）。而してこの土語の卓越によつて象徴される古い文化の残存地域は、同時にさきに述べた共同体遺制の残存のもつとも濃厚な地域とほぼ一致することは注目されねばならない。換言すれば共同体の変容の停滞的な地域は古い文化の残存

地域と一致するのであり、共同体の変容過程の地域的変差が、新旧両文化の混淆の度合の地域差にそのまま反映していると考えられるのである。

では共同体の変容過程は、かかる地域の文化的特色の形成に当つてどの様な意義を有したであろうか。Murdoch も指摘したように、一般に共同体 community は、それぞれ《特定の total culture を維持する典型的な社会集団》であるから、この共同体が急速に変化する場合には、当然その内部に維持される固有の文化もまた大きな変容を蒙るものと考えられる。また共同体の変容が停滞的であればあるほど、その内部に維持される固有の文化の残存する度合も大きくなるわけである。従つて現在ペルーの高地部に残存する古い文化的特色についても、元来その古い文化を保持していた共同体が前節で述べたような変容を阻止する種々の条件に支えられて急速に崩壊せず、漸々に解体したため、その緩慢な解体過程の中から古い文化要素が遺産としてと残されてきたものとみられるのである。また低地部では、先に指摘したように、白人文化の侵入が早く、気候的にも外来農業の経営が可能であつたことなどから、共同体の解

体が速やかに行われ、そのため共同体の保持していた文化の特色が比較的早く失われたものと考えられるのである。^⑧

しかしながら、高地に古い文化が残存し、低地に新しい文化が卓越すると云つても、それは程度の問題であつて、高地に固有のインディアンの文化がそのまま残り、低地にスペインの文化がそのまま移植されたというのでは勿論ない。むしろ中部アンデス地域全域についてみれば、先にも指摘した如く、土着のインディアンの文化と外来のスペインの文化の混濁によつて生み出された新しい混合文化——メスチソン文化と一般によばれる——の存在が、その地域を文化的に特色づけるものといわれている。つまり共同体の緩慢な解体過程に伴つて残されてきた土着の古い文化要素は、新しい文化と混濁することによつて、中部アンデス地域全体を特徴づける民族文化の形成に大きな役割を演じてきたのである。^⑨

この点に関し、例えば中部ペルー Junin 州の地方町 Si caya では、現在住民の大半はメスチソンと分類され、社会的には伝統的な moiety が僅かに現存するのみで、生活様式の全体にメスチソンの要素の卓越することが報ぜ

られている。^⑩しかしこの町にも一七世紀まで ayllu の残存していたことが確認されているのであつて、征服以後少くとも一世紀間或はそれ以上に互り、土着の共同体が存続し、現実機能に演じていたことが知られている。而してこの町のメスチソン文化は、この古い共同体が漸々に解体するのに伴つて形成されてきたものと考えられるのである。同様の例はメスチソンの文化要素が比較的多いといわれるリマ州においても、先に指摘した如く、Santísima Trinidad de Huancabamba ayllu のもつ共有地の分割が前世紀末、或は今世紀初頭まで行われなかつたことから知られるのであるが、征服後も根強く存続した伝統的な共同体を媒介に、中部アンデスにおいては、新旧両文化の融合がなされたと言ふことができよう。

このような点からみて、一般に中部アンデス地域における民族文化の形成の基礎には、新しい優勢な外来文化の侵入に対し程度の差こそあれ抵抗を示し、その結果、固有の文化要素の急速な消失を阻止した伝統的な共同体 ayllu の機能が重視されねばならない。即ち中部アンデス地域においては、他の土着文化が急速に消滅した地域と異り、共同

体の示した抵抗のために、土着文化の変容には *Opburn* の
 いう一種の文化的遲滯 *cultural lag* が生じ^⑩、その間に新旧
 両文化が再整調されて新しい民族文化としてメスチーン
 文化が生成されて来たと考えられるのである。かくして中
 部アンデス地域を特徴づける民族文化は共同体の変容、解
 体の過程の中から芽生え、育つてきたとみることができ
 るのであり、この点に我々は中部アンデス地域における共同
 体の地理的意義を見出しうるのである。

- ① Mishkin: *ibid.*, p. 453.
- ② Tschopik: *Highland Communities*, p. 31—34.
- ③ Mishkin: *ibid.*, p. 447—448.
- ④ Tschopik: *Highland Communities*, p. 21—23.
- ⑤ Gillin, J.: *Moche: A Peruvian Coastal Community* (Smithsonian Institute of Social Anthropology, Publication No. 3.) 1947 と同じ水利に同じページ一六頁以下。
- ⑥ Rowe, J. H.: *The Distribution of Indians and Indian-languages in Peru*, Geogr. Rev. 37, p. 202 ff.
- ⑦ Murdock, G. p.: *Social Structure*, 1949 p. 82.
- ⑧ 海岸地帯におけるかかると新しい文化をメスチーン文化の中
 の *メスチン* Creole Culture とよんで特徴づけようとする意見が
 Tschopik や Simmons によつて提起されてゐる。(Simmons,
 O. G.: *The Creollo Outlook in the Mestizo Culture of*

Coastal Peru, Am. Anthropol. 62, 1955)

⑩ Gillin, J.: *Mestizo America*, (Linton, ed.: *Most of the World*, 1950) p. 168 ff.

⑪ Tschopik: *Highland Communities*, p. 13, p. 43—44.

⑫ オクバーン、兩宮・伊藤共訳、社会変化論、昭和十九年、一
 八八頁以下。

むすび

以上要するに、中部アンデス地域に古くから存在した社
 会集団 *ayllu* は、拡大家族を単位に、地域内婚によつて結
 び合わされた生活共同体であるとともに、社会、経済、行
 政などの諸機能の集積する共同体でもあつた。今もし『は
 しがき』で述べたように「最小の地域統一体としての『集
 団積分体』のおかれる場」を「基礎地域」とよぶならば、正
 しく *ayllu* は中部アンデスにおける基礎地域とみなしうる
 ものである。而してこの基礎地域 *ayllu* の中には、征服以
 後外来文化の侵入とによつて、その殻を烈しく打破られ、
 地域の機能的進化のオーダーを一挙に推しすすめて最小地
 域統一体として個性を急速に失うものが生じた。しかし他
 方では、この基礎地域の解体を阻止する諸条件に支えられ

地域の機能的進化の過程に遲滞を生ずる例も少くなかつた。その結果、基礎地域の中に保持されてきた固有の土着文化と基礎地域を覆つて拡散した外来文化は、相互に再調整され、ここにより高次な混合文化をもつ「民族地域」が形成されたのである。勿論、現在中部アンデスでは共同体は遺制として残存するにすぎず、共同体のもつ機能も著しく減少している。しかし現代の「地域」の特色を生み出すに當つて、この *ayllu* 共同体の果たした役割の重要性は十分評価されねばならない。

なお同様の事例は、メキシコ^①・グアテマラなどのメステーン・アメリカ各地においても見出されるが、これらの事例については他日稿を改めて比較研究することにし、この小論はひとまずここで筆を置きたい。

拙筆に当り常に御指導を頂いた織田武雄・藤岡謙二郎・有光教一各先生はじめ、この小論執筆に当り勵まして頂いた押野昭生氏に深い感謝の意を表す。

① メキシコにおける共同体は *ejido* とよばれ、一九四〇年のセンサスによればその数約一四、七〇〇、平均七〇家族といわれ *pusé*。 (James, P.: *Latin America*, 1950 p. 552.)

② *グアテマラ* におけるは最小の行政単位 *municipio* が生活共

同体を形成してゐる。Tax, S.: The *municipios* of the midwestern highland of Guatemala, *Am. Anthropol.* 39, 1937 p. 423—444.

McBride, G. M. & McBride, M. A.: Highland Guatemala and its Maya Communities, *Geogr. Rev.* 32, 1942 p. 252—268.

McBride, F. W.: Cultural and Historical Geography of Southwest Guatemala (Smithsonian Institute of Social Anthropology, Publication No. 4, 1947) とくに八八頁以下。

(昭和三年十一月稿)

史学研究会例会予告

左記により当会二月例会を開催いたします。多数御参集をお待ちいたします。

日 時 二月七日(土)午後一時より
場 所 京大染友会館(市電近衛通下車)

講師演題

鎌倉幕府法の封建的性格

上横手敬雅

英国中世地方史研究の動向

越智武臣

Geographical Significance of the Communities in Central Andes

By

Takaaki Sasaki

The existence of the communities, called ayllu, in the central Andes area had been well-known for a long time. Taking formerly enlarged families as their unit, they were a kind of living community combined with regional marriage, economic community which held cultivated land, irrigation waterway and pasture in common and assigned lots, and a unit of administration.

After the Spanish conquest, some of these communities that were deprived of their material foundation of existence were dissolved promptly; on the other hand, many held by various factors preventing the dissolution were in a gradually changing process. As native culture of such communities was comparatively well reserved within them, foreign culture developing over the communities could be gradually mixed with theirs; therefore, the national culture has been formed, characterizing the central area of Andes as it is. In other words, the national character of the central Andes area has been growing in the changing process of the communities.

The Traffic Routes Without passing *Ho-hsi* (河西) in the *Hsi-hsia* (西夏) Era

By

Masana Maeda

In the so-called *Hsi-hsia* (西夏) era, there appeared the routes from west to east through the north or south side of *Ho-hsi* (河西) parallel to the *Ho-hsi* passage, because of interception of the old traffic route from the central Asia to *Chung-yüan* (中原) through the *Ho-hsi* passage; which is established as a theory, though its detail still remained unknown.

Especially on the interpretation of the historical material about the tribute-bringing by the *Fu-lin* empire (拂菻国) in October of the 4th year of *Yüan-fêng* (元豐), there is an absolute difference in views between Dr. Rokuro Kuwata and Prof. Kazuo Enoki. The very point